·	tory of Academic resouces			
Title	「マルクス派最適成長論」の価値論、剰余価値論、利子論の理論的実証的探求			
Sub Title	Theoretical and empirical research of value, surplus-value and price on the Marxian optimal growth theory			
Author	大西, 広(Onishi, Hiroshi)			
Publisher	慶應義塾大学			
Publication year	2018			
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2017.)			
JaLC DOI				
Abstract	本研究は前年度、前前年度に引き続き、数理マルクス経済学分野の最先端に位置する「マルクス派最適成長論」の研究上の新たな展開をめざすもので、本予算により、以下のいくつかの方向での研究の発展を得ることができた。 ②本研究テーマのとおり、「マルクス派最適成長論」の価値論、剰余価値論、利子論に関する研究の現度俗での到達点を整理した。これは『三田学会雑誌』の論文として公表することができ、関連した研究会、学会での討論に大いに役立った。具体的には、「欧米マルクス派」で近年流行の単一体系学派の議論に関する学会分科会を10月開催の経済理論学会で設定し、3名の報告者をコーディネートし、合わせ自説を展開した。これは近年の議論との接点を探るうえで重要な場となった。具体的には、「ないまでが、実に関する学会が表しているというないのでは、アマルクス派員では一般では、アマルクスが最適成長論」との関係、実証での簡便性の問題、その際に賃金に労働の質が反映されていると見られるかどうかといった問題などである。経済理論学会のこの分科会は大きな反響を呼び、来年度も開催されることとなった。(②もうひとつの研究分野となったのは「マルクス派最適成長論」と経済政策論との関わりである。「マルクス派最適成長論」はそのインブリケーションとして成長率の長期的低下や政府規模の縮小を帰結しているが、もしそうならどのような政策論でなければならないのかといった問題である。この論点は経済理論学会や現代の理論フォーラムの機関誌上での発表を依頼され、佐頼原稿として執筆することとなった。 ②こうした史的唯物論との関わりは、土台における旧体制から新体制への生産力的合理性の変化が上部構造に反映される仕組みとその時間的ずれをモデル化する論文としても公表されることとなった。この新たな研究成果は17月にアモイで開催された国際学会においても報告した。また、この論点は、世界システム上の旧顕雑国から新覇権国への転換の問題としても範告した。また、フトルの研究成果は来年度慶應義塾経済学会で開催予定のマルクス生誕200周年記念ミニコンファレンスで公表予定である。 This research aims at a new development in the research on the "Marxian optimal growth theory" in the mathematical Marxian economics. By the help of this budget, I has been able to develop the following researches. ② I wrote a paper to explain the new achievements of the value theory, surplus value theory and interest theory of "Marxian optimal growth theory". This was published as a paper in "Mita Journal of Economics", and also presented at related academic societies. Specifically, in the annual conference of the Japan Society of Political Economy, I set a special session to discuss the recent development of the Western Marxian Economics. There I coordinated three reporters, and made commice policy theory. "Marxian optimal growth theory" implies that a long-term decline in growth rate and reduction in government scale. If so, what kind of policy theory is necessary? I was asked to write two papers on this issue. ② The relationship with theory in publics as a paper which models the mechanism of the change in superstructure caused by the change of economic base. This new academic achievement was also reported at the linternatio			
Notes				
Genre	Research Paper			
	'			

https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2017000001-20170170

LIRI

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2017 年度 学事振興資金(個人研究)研究成果実績報告書

研究代表者	所属	経済学部	職名	教授	補助額	200 (1	3)千円
	氏名	大西 広	氏名 (英語)	Hiroshi Onishi		200 (B)	5) TD

研究課題(日本語)

「マルクス派最適成長論」の価値論、剰余価値論、利子論の理論的実証的探求

研究課題 (英訳)

Theoretical and Empirical Research of Value, Surplus-value and Price on the Marxian Optimal Growth Theory

1. 研究成果実績の概要

本研究は前年度、前前年度に引き続き、数理マルクス経済学分野の最先端に位置する「マルクス派最適成長論」の研究上の新たな展開をめざすもので、本予算により、以下のいくつかの方向での研究の発展を得ることができた。

- ① 本研究テーマのとおり、「マルクス派最適成長論」の価値論、剰余価値論、利子論に関する研究の現段階での到達点を整理した。これは『三田学会雑誌』の論文として公表することができ、関連した研究会、学会での討論に大いに役立った。具体的には、「欧米マルクス派」で近年流行の単一体系学派の議論に関する学会分科会を 10 月開催の経済理論学会で設定し、3 名の報告者をコーディネートし、合わせ自説を展開した。これは近年の議論との接点を探るうえで重要な場となった。具体的には、置塩による「マルクスの基本定理」との関係、実証での簡便性の問題、その際に賃金に労働の質が反映されていると見られるかどうかといった問題などである。経済理論学会のこの分科会は大きな反響を呼び、来年度も開催されることとなった。
- ② もうひとつの研究分野となったのは「マルクス派最適成長論」と経済政策論との関わりである。「マルクス派最適成長論」はそのインプリケーションとして成長率の長期的低下や政府規模の縮小を帰結しているが、もしそうならどのような政策論でなければならないのかといった問題である。この論点は経済理論学会や現代の理論フォーラムの機関誌上での発表を依頼され、依頼原稿として執筆することとなった。
- ③ こうした史的唯物論との関わりは、土台における旧体制から新体制への生産力的合理性の変化が上部構造に反映される仕組みと その時間的ずれをモデル化する論文としても公表されることとなった。この新たな研究成果は 10 月にアモイで開催された国際学会に おいても報告した。また、この論点は、世界システム上の旧覇権国から新覇権国への転換の問題としても応用できることも後に明らか となっている。
- ④ これらの研究成果は来年度慶應義塾経済学会で開催予定のマルクス生誕 200 周年記念ミニコンファレンスで公表予定である。

2. 研究成果実績の概要(英訳)

This research aims at a new development in the research on the "Marxian optimal growth theory" in the mathematical Marxian economics. By the help of this budget, I has been able to develop the following researches.

- ① I wrote a paper to explain the new achievements of the value theory, surplus value theory and interest theory of "Marxian optimal growth theory". This was published as a paper in "Mita Journal of Economics", and also presented at related academic societies. Specifically, in the annual conference of the Japan Society of Political Economy, I set a special session to discuss the recent development of the Western Marxian Economics. There I coordinated three reporters, and made comments on their presentations. That discussion was related to the Okishio's Fundamental Marxian Theorem, the problem of quality of labor and so on. This session will be continued in the next year.
- ② Another research field was the relationship between 'Marxian optimal growth theory' and economic policy theory. "Marxian optimal growth theory" implies that a long-term decline in growth rate and reduction in government scale. If so, what kind of policy theory is necessary? I was asked to write two papers on this issue.
- ③ The relationship with historical materialism will be published as a paper which models the mechanism of the change in superstructure caused by the change of economic base. This new academic achievement was also reported at the international conference held in Xiamen in October. This framework can be applied as a problem of conversion of the hegemon countries in the world system.
- ④ These research results will be presented at the Mini Conference of the Keio Economic Society commemorating the 200th anniversary of Marx 's birth.

3. 本研究課題に関する発表							
発表者氏名 (著者・講演者) 発表課題名 (著書名・演題)		発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)				
大西広	マルクス派最適成長論の諸次元	『三田学会雑誌』第 110 巻第 2 号	2017.7				
大西広	『資本論』のコア思想とその数理化	『経済科学通信』第 145 号	2018.3				
大西広	民主的改革論の「失敗」と経済政策 論の課題	『季刊経済理論』第 54 巻第 4 号	2018.1				
大西広	労働者階級が社会運動に参加・団結する条件について「社会的ジレンマ」ゲーム理論の応用可能性	. ,	2018.7				